

所属・氏名（心理科学研究科 実践臨床心理学専攻 氏名：榎木 宏之）

著書、学術論文等の名称		単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概要	
1 (学術論文) Attitudes towards Ambiguity in Japanese Healthy Volunteers 『筆頭論文』		共著	2018年12月	Current Psychology 37(4) pp. 913～923 Springer Publishing DOI:10.1007/s12144-017-9569-9	一般健常人1019名を対象に既存尺度「曖昧さへの態度尺度」について因子分析行った結果、4因子が抽出され、関連尺度との間では有意な相関が認められ新たな因子構造が確認された。(11頁)(担当部分:ほぼ全般にわたり担当。担当頁特定不可能)(Enoki, H., Koda, M., Saito, S., Nishimura, S., Kondo, T.)	
Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy individuals 『筆頭論文』			2019年4月	Health Psychology Open 6(1) SAGE Publications DOI: org/10.1177/2055102919840619	一般成人の曖昧さへの態度の抑うつ・不安への影響力を検討した結果、Enjoymentという曖昧さを享受する態度には、抑うつの低減というメンタルヘルスの向上に繋がる介入・対処行動を含む可能性が示唆された。(7頁)(担当部分:ほぼ全般にわたり担当。担当頁特定不可能)(Enoki, H., Koda, M., Nishimura, S., Kondo, T.)	
精神科病院における入院長期化の予測因子に関する研究 -精神科リハビリテーション行動評価尺度(REHAB)を用いた社会機能における後方視的研究			2019年8月	精神医学 61(8) pp. 955～963 医学書院	社会機能の中に潜む、1年以上の精神科病院入院継続の可能性を予測するリスクファクターを抽出することを目的に、社会機能尺度 REHAB を用いて後方視的に検討した結果、「社会生活の技能」のカットオフ値が算出され、同因子が1年以上の入院を予測する因子として認められた。(9頁)	
精神科急性期病棟入院時の心理教育プログラムにおける疾病及び薬物の知識の変化が退院後の外来通院期間に及ぼす影響			2019年12月	九州神経精神医学 65(1) pp. 26～32 九州精神神経学会	精神科病院入院中に心理教育を受講した統合失調症患者の継続的外来通院の要因を後方視的に検討した結果、抗精神病薬への理解と、薬を服用していても社会復帰はできるとの認識が外来通院の継続を予測することが示唆された。(7頁)	
病名の把握・告知の体験・心理教育受講体験が統合失調症患者の知識度に及ぼす影響			2020年10月	琉球医学会誌 39(1-4) pp. 65～72 琉球医学会	統合失調症を対象とした心理教育において、自身の病名を正しく把握していることと、心理教育を受けたという自覚が、知識度の予測因子であることを検証した。(8頁)	
沖縄県内における臨床心理士の倫理研修の現状と課題—「沖縄県公認心理師協会」設立を前にして			印刷中	沖縄心理学研究, 発行元:沖縄心理学会	沖縄県における臨床心理士の倫理研修の現状と課題について考察した。研修運営においては、倫理的ジレンマに関して自覚的になる課題を扱うことの重要性が考えられた。	
2 (報告・発表) Factor analysis of attitudes towards ambiguity scales and its relation to the acceptance and action questionnaire in Japanese healthy volunteers 『筆頭発表』			2016年7月	31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.	日本人一般健常人1019名を対象に、既存尺度「曖昧さへの態度尺度」及び関連尺度を用いた質問票調査を行い、新たな因子構造を検証した。(担当部分:ほぼ全般にわたり担当。担当頁特定不可能)(Enoki, H., Koda, M., Nishimura, S., Kondo, T and Odo, S.)	
Evaluation of temperament profiles in Japanese patients with major depressive disorder and bipolar disorders using TEMPS-A/MPT		共著	2016年7月	31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.	一般健常群・臨床群に気質尺度“TEMPS-A/MPT”を用いた質問票調査を行った結果、循環気質は気分の不安定さを示し、不安気質は大うつ病性障害に帰属し、焦燥気質は双極性障害に関連する可能性が示唆された。(担当頁特定不可能)(Koda, M., Kondo, T, Enoki, H, Yamamoto, T)	
多次元的にみた“曖昧さ”と“態度”的関係について			2017年9月	日本心理学会第81回大会公募シンポジウム	曖昧さへの態度尺度の因子構造に関する発表(役割:企画者・話題提供者)	
曖昧さへの態度とメンタルヘルス：抑うつ及び不安への影響を中心にして			2018年9月	日本心理学会第82回大会公募シンポジウム	曖昧さへの態度が抑うつ及び不安症状に与える影響に関する発表(役割:企画代表者・話題提供者)	
曖昧さへの態度の臨床への応用可能性: 自閉スペクトラム症特性と曖昧さへの態度			2019年9月	日本心理学会第83回大会公募シンポジウム	自閉スペクトラム症特性と抑うつ・不安症状の間における曖昧さへの態度が果たす役割に関する発表(役割:企画代表者・話題提供者)	
3 (査読歴)			2018年1月 ～2021年5月		2018年: Australian Journal of Psychology (1編) 2019年: Australian Journal of Psychology (1編) 2019年: Journal of Community Psychology (1編) 2020年: SAGE Open (3編) 2021年: SAGE Open (1編)	